

今日の説教のポイント <コリントの信徒への手紙Ⅱ5章11節~21節>

御言葉に聞いて、今年の歩みの指針を与えられたい。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであつて」
(17~18)

パウロが熱く語っている箇所です。中でも、「神様によって新しくされた」と力を込めて語るのが伝わって来ます。どうして彼はそのように思えるようになったのでしょうか？ 「もうだめだ」と思われること多い現代社会です。今の私たちにも、新しくなれることは可能なのでしょうか？

「トラウマ」という言葉があります。阪神・淡路大震災後にしきりに使われるようになり、牧師である私の所にも、「私は、小さい時に~されたことから来るトラウマを負っているのです」と来てすぐ語る人が増えました。この言葉は元々、正式には「心的外傷後ストレス障害 PTSD」と言い、ベトナム戦争帰還兵やレイプに遭った被害者など、深い心の傷を負った人に起こる心の後遺症を指す言葉として精神医学界で使われ出したものです。それがテレビのドラマなどでも、トラウマだと言えば、「ああ、それならしょうがないな。かわいそうに」と見なされるような使われ方をされたものですから、上に述べたように、私の所に来る人も、「自分はトラウマを持っている」と話すことから始める人が増えたわけです。

そんな時に、重要な本に出会いました。それは、正しくトラウマが理解されていないと覚えておられた精神医学界の権威の中井久夫先生が訳された『心的外傷と回復』（ハーマン著、みすず）という本でした。分厚い本の前半はトラウマの症例報告ですが、後半は、これが大事なのですが、トラウマは克服できるということを実際の事例報告の形で書かれたものでした。私が強い感動を持って読んだのは、家庭内暴力（DV）に遭った女性が、信仰によって立ち直って行く過程が報告されている箇所でした。彼女は、出口なしと思われた日々から長い時間をかけて立ちあがり、自分と同じ被害に遭った人々のために働く地方検事として今は精力的に生きています。その彼女がこう言っています、「私は女性たちが何にせよ希望の感覚を持つてほしいのである。それは一切の希望を持たないということがいかに恐ろしいことであるかを覚えているからである。出口なしと感じた日々のことである。あれは私の使命の一部だと痛感している。なぜ神がああ結婚で私が死ぬことを許したまわなかったのか。その理由の一部はこれだと思っている。だから私は洗いざらい公衆の面前で語る事ができたのである」(P.331)。

彼女は、神様を恨むのではなく、また絶望して果てるのでもなく、自分の受けた苦悩の中に神様からの自分の使命を聞き出そうとし、そして聞き出したのです。自分だから分かる苦悩を負う人たちのために働くことでした。「パウロが新しくされる」と説いた理由、そしてこの女性を絶望から立ち上がらせたもの。それは、キリストを私たちの中にお送り下さった神様の中にあつたのです。私たちも今年、この神様を知る者らしい生き方を、御言葉に聞きながらして行きたいと思います。